

# 令和5年度「広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業」成果報告書

広島市立大学

国際学部 准教授 山根 史博

## 【研究テーマ】

農村地域の将来に対する住民の心の内と真の魅力への接近

## 【活動の目的】

人口流出と高齢化が進む中、農村では地域社会・自然環境の維持がますます困難になっている。学校教育でも地域活性化に係る授業が行われているが、座学やほんの数回の現地訪問では、住民の地域の将来に対する考えや苦悩、広い意味での地域の魅力を理解するのは困難である。本プロジェクトは、年間を通じて学生たちと大和町に通い、農村の生活・生業を体験し、住民や自然と交流を重ねていく中で、学生に地域活性化の要点や自分たちにできる貢献の可能性を感じ、考えてもらうことを目的とする。

## 【参加学生】

国際学部1年2名、芸術学部1年1名、国際学部2年19名、  
情報科学部2年1名、国際学部3年8名、国際学部4年2名

## 【連携地域団体】

株式会社とまはうすコーポレーション

## 【活動の内容】

### ○7月30日

現地に訪問し、吉岡さんの近隣住民が所有する耕作放棄地の草刈りをするとともに、9月の収穫祭でマルシェの出店をお手伝いすることになっているため、会場となる亀山神社にも訪問し、宮司さんに挨拶をしてきた。



### ○8月17日

現地に訪問し、吉岡さん宅近くの集会所にて、マルシェに出店予定の焼きおにぎり、冷製スープの試作・試食を行った。事業計画ではさつまいものスイーツを開発・出品するとしていたが、吉岡さんがさつまいもではなく、玉ねぎを栽培することにしたので、玉ねぎの冷製スープに変更した。



○9月23日

現地に訪問し、吉岡さんの耕作田で稲刈りを体験し、その後、亀山神社での収穫祭、およびマルシェ（焼きおにぎり、アイスクリーム、ジュースなど）をお手伝いした。一部の学生は前日に大和町入りし、収穫祭の準備、運営、片付けなどに参加した。なお、玉ねぎ冷製スープについては、野外での冷却が困難だったため、当日の出店は断念した。



○10月28・29日

本学の大学祭にて、焼きおにぎりと玉ねぎスープを出店した。2日間で300食ほど売り上げた。



○12月9日

現地に訪問し、亀山神社にて、正月準備のための境内や参道の掃き掃除、初詣用のテントの設営をお手伝いした。集めた落ち葉で焚き火をし、焼き芋を体験させていただいた。



○1月20日

現地に訪問し、亀山神社にて、境内や参道の掃き掃除、初詣用のテントの片付けをお手伝いした。また、2024年度の大和町での活動計画について吉岡さん、学生たちと協議した。なお、事業計画では年明けは竹害対策を予定していたが、大和町での活動サイトの多様化とコンテンツの拡充のため、年度内の竹害対策は取りやめ、神社での活動および宮司さんとの交流と、次年度の勝田央に対する学生からの主体的な企画立案に時間を割くことにした。



○2月26日

現地に訪問し、集会所にてもち搗きを行った。吉岡さんのお父さんにもちの搗き方を教えていただいた。また、亀山神社にも寄り、参道の掃除をさせていただいた。



### 【活動の成果】

一年間の活動を通じて改めて感じたのは、地域の人たちにとって学生はその存在自体が特別であるということ。つまり、学生たちがどういう動機を持っているかは別にして、彼女彼らが地域に関わることが、地域住民（吉岡さん、吉岡さんのお父さん、宮司さんなど）の活力になっている。

ただし、だからと言って学生たちの動機はどうでも良いというわけではない。最初は楽しそうだから活動に参加してみたが、飽きたからもう参加しない、というのではむしろ相手を傷つける。また、いつまでも吉岡さんや申請者が用意するコンテンツに乗っかるだけというのもよろしくない。それはもはや「お客様」のスタンスを決め込んでいる状態であり、これもまた地域を疲弊させることになる。とはいえ、そのようなスタンスになってはいけないうちで伝えたところで学生に心底理解してもらえないわけもなく、むしろ委縮につながる恐れもあり、不安を抱えながら学生を引率してきたというのが実際のところである。

そのような不安を常に抱いていたからか、大和町での活動に継続的に参加し、楽しむだけでなく、何か意義を感じて活動する学生が少なからず出てきたことは意外であった。それが自分のためなのか、あるいは吉岡さんや大和町のためなのかは置いておくとしても、そのような学生が出てくることを期待しての本申請であり、大きな収穫と言わせてもらいたい。

このことは吉岡さんにもはっきり伝わっている。今回の収穫祭においては、国際学部4年の高木洋助さんを中心に、吉岡さんのお手伝いをしていた。学生たちが主体的に吉岡さんをサポートすることを期待したため、収穫祭案件について申請者はノータッチという姿勢を貫いていた。ただ、高木さんからは、定期的に吉岡さんを含む他のスタッフや学生たちと打ち合わせをしていること、リソースやノウハウの欠如で様々な困難があるという話は度々聞いていた。困難を（に）感じているということは、裏返せば、学生たちがアルバイトのように下請け的に手伝っているわけではなく、自分事として主体的に取り組んでいることの証左でもある。収穫祭の後、吉岡さんはそのことが嬉しかったらしく、涙を流しながら高木さんに感謝したそうである。それは高木さんにとっても得難い経験となった。

本申請が大和町を本当に活性化できているかと問われれば、それについては分からない。ただ、その中で学生たちの活動が吉岡さんを確実に力づけているという点を見逃してはならないと思う。高木さんは卒業するが、幸いにして彼を引き継げる学生も出てきている。今後も大和町と様々な面で関わり続け、互いに力づけられる関係を紡いでいきたい。